宇野千代全集

第三卷

宇野千代全集　第三巻

昭和五十二年九月　十　日印刷
昭和五十二年九月二十日発行

著　者　宇野千代
発行者　高梨　茂
印刷者　山本正宜
発行所　中央公論社
東京都中央区京橋二ノ一
電話（五六一）五九二一
振替東京二―三四
検印廃止
©一九七七

小説　三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

小品集

キャッチボール 9
雨・子供 15
港 20
春の夜 24
煖炉 27
明るい午後 31
踏切 36
ママ 43

遺産 45
記憶 47
悲劇 50
大工の話 56
びい玉 59
雨(1) 65
雨(2) 68
月夜(1) 78
月夜(2) 83
悪戯 91
踏切のある風景 94

色ざんげ　103
あとがき　315
書誌　316

小品集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

キャッチボール

洋服屋はその妻の死んだ百日目くらいに僕の家へやって来た。僕は決して洋服を註文しなかったが、ただ彼と庭でキャッチボールをやるのである。

僕らは上着を脱いで庭へ出た。明るい太陽の下で、しかしまったく元気のない洋服屋と非常に汚れている彼のシャツを発見して僕は驚いた。

「汚いシャツだな、」

「いや、どうも、」

洋服屋は曖昧に笑いながら赧くなった。僕は思いきりボールを高く上げながら言った。

「君の細君は君に惚れてるんじゃァないんだな、」

「家内は死にましたので、」

僕は驚いて彼の顔を見た。ぽうん、と音がしてボールは遠くではね上った。僕の犬は洋服屋の代りにそれを追いかけた。(どうして洋服屋というものはこんなに丁寧な口を利くのか分らない。

そのために僕は、洋服屋はついこの間妻を失くしたのだと言うことまで忘れてしまうのだが。）

「ヨネ！　ヨネ！」

僕は大きな声で僕の犬を呼んだ。犬は隣家の庭からボールを銜えて飛んで来た。僕はもう一度それを高く放りながら空の方へ向いて大きな声で言った。

「じゃァ僕が好い細君を世話してやろう。」

「いやァ、どうもまだ当分は。」

洋服屋はまたボールをうけ損ねた。僕らの球拾いである僕の犬はそのボールよりも速く転がった。ちょうど洋服屋の妻の死んだ頃に生れたこの犬は、彼もまた僕らの仲間の一員であることを信じて疑わないらしい。そして、洋服屋がボールをうけ損ねるのは彼に追っかけさせるためだと思っているらしい。彼はそれほど嬉々としてボールを銜えて来た。僕は遠くから見ていたが、その犬の口からボールをうけ取っている洋服屋の顔はまるでべそを掻いているようなのだ。おやおや、そんなに死んだ細君を可愛がっていたのかな。しかし僕はそれを知らないから、ちょうどそのとき、向いの三角屋根からばたばたと羽音を立てて一どきに飛び立った鳩の群へ眼をやりながら、うっかり言ったのだ。

「亡った細君で一ぱいだね、」

「いや、その反対ですよ。」

洋服屋は大きな声で言った。「あいつはあなた、まるで親のために貰ったようなものなんで、いや、ほんとうでございますよ。手前はそれで二度も家を飛び出しました。何ですか、まるで性が合いませんので、こんなことを言っちゃへんですが、あいつが病気の間でも、早く片づいてくれたらどんなに楽だろうと思ったくらいでさァ、」

「女房のある奴はみんな同じことを言うよ。」

「そうですよ、そいで死なれて見ると初めて、今度は子供が可哀そうでね。ほしいことをしたなと思うのでございますからね、」

「ほォ、子供があるのかい？」

「へえ、二人ありますので。それがどうにも手のかかる盛りだものですから、やれ靴のビジョが見えなくなったの、クリームパンはまずいから可厭だの、——へえ、お弁当がいりますので、大きいほうはもう二年生でございますから、ですからもう、家中が野っぱらのように荒れてまして、——でも子供は平気なもんで、どたんばたん駈けっくらをしたりしていますが、いや、女房は真っ平でございますよ。この上、女房に来られては子供が可哀そうでございますからな、いや、もう、父親のそれが義務でございますからな。——」洋服屋はちょっと口を噤んだ。それから僕の眼を追って、「何でしょう、あれは、」「伝書鳩だよ、あそこの窓のところで棍棒を振り廻してるのが見えるかい？　ああやって追ってるんだよ、だんだん遠方へ行かせる練習をしてるんだ。」

「ははァ、――」

洋服屋はもうボールを投げなかった。ちょうど三角屋根のうしろから陽がさしているので、鳩を追っている男の姿は、何か黒い塊の動いているように見える。僕は毎日、その塊の運動に馴染になっているのだが、洋服屋はいつまでも空を向いたまま、少し口をあけて呼吸をしているのだ。彼はどうも心臓が悪いらしい。僕はそこで陽気に、大きな声で言った。

「きっとあの男も君の仲間だぜ、どうも細君に死なれたような顔をしてるじゃァないか。」

「へえ、」

洋服屋はぼんやりした顔つきで僕を見たが何か聴き違えたのであろう、眩しそうな眼をして言った。

「私のうちの裏にも保険の勧誘員がおりましてね、お話ししましたでしょうか？」

「いや、知らないよ。」

「その男があなた、四五日前に女房を貰いましたんですが、ちょうど私のうちの二階の窓をあけるとほんの露路の向いでございますから、へえ、二階を間借りしているんでございます。その男があなた、へんなことですが、そっくり同じなんで、六つくらいの女の子がありましてね、それでついこの春、女房に死なれたんでございます。そいつが新しい女房を貰いましてね、――どこか、ちんやバーかどこかの女給をしていたような女でございますよ。二階の障子をあけるとそっ

くり見えるものですから、どうもその、そっくりその、その男のやっていますことが私の裏をやってますような気がしましてね、」

「そいつは面白いね、」

僕たちはいつの間にか芝の上に坐っていた。僕の犬はちょっとの間僕らの前に坐って待っていたが、僕らが彼に構わぬのを見ると、ひとりでボールの紐を銜えて頭を地べたに摺りつけ始めた。僕らのボールというのは小型のフットボールなのだから、ぽんぽんと弾む音を発して犬の頭にぶつかるのだ。洋服屋はふいに僕の方へ恥しそうな顔を向けて、にっと笑った。

「私のやりそうなことをさきにその男がやっているのでございます。女房は毎朝、ながいことかかって白粧をつけています。亭主は勤めに出ます。するとあなた、女は窓をあけて下手な大正琴を弾き始めますので。近所の話ではその女がひどく女の子をいじめましてね、亭主がいなくなるとよく女の子の泣き声が聴えますんでさ。『そんなに泣かないでおくれ、』ってその女が言いますので、『泣きたいんなら、なぜ父ちゃんのいる中に泣かないんだい？　さもさも母ちゃんがいじめるみたいで困るじゃないか、』ってね、そう言いながらやっぱり、自分は大正琴を弾いてますんで、」

「その細君は美人かい？」

僕は真顔でそう訊いた。

「何ですか、洋服なんぞ着ていますが、あれでやはり美人でしょうね、夕方なんぞよく、若い男が窓の下に立って呼んでいますんで。——保険屋はもう好い齢でございますからな、」

「さァ、もう一度やろう、」

僕は思いきり空に向けてボールを高く投げた。洋服屋は真っ赤になって、しかし今度はうまい工合にぽっかりとうけとめた。空はどこまでも明るく晴れている。僕の犬は僕たちの中ほどに腰をおとして、まるで首振り人形のように首を振りながら、ボールの行方を追っている。僕らはもう決してボールを落しはしなかったから。——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com